2019年度　長期研修報告書

所属　文学部　　職名　教授

氏名　木谷 眞理子

＜研　修　概　要＞

2019年4月1日から2020年3月31日まで、東京女子大学にて、「平安時代の物語表現」について研究をおこなった。あらすじにすればほぼ同じ物語を、異なる表現で語り直していく営み――具体的には、『狭衣物語』の改変と、平安時代の物語の絵画化――に注目する研究である

『狭衣物語』の伝本は、深川本系・流布本系・異本系に大別できる。３系統を見比べると、表現方法はもちろん、人物の性格や思考などにも違いが見られるが、あらすじはおおむね一致している。あらすじを変えずに、表現を変え、人物造型にも修正を加えていくという作業が、なぜこれほど熱心に行なわれたのか。この謎を解くため、改変本文であることが確定している異本系の本文に着目する。異本系は、深川本系・流布本系に比べ研究は大きく遅れており、本文校訂、現代語訳、注釈作業から着手する必要がある。

2015年度より、東京女子大学の今井久代氏、成蹊大学非常勤講師の吉野瑞恵氏とともに『狭衣物語』異本系本文の研究を進めているが、2019年度、研修者は『狭衣物語』巻２の後半から巻３の前半までについて、巻２は九条家旧蔵本、巻３は伝慈鎮筆本をそれぞれ底本として、本文校訂と現代語訳をおこなった。また、定期的に開催している研究会では、研修者が作成した校訂本文・現代語訳について検討を加えるとともに、底本の特徴を異本系他伝本や他系統伝本と比較することによって探った。

『狭衣物語』異本系本文に結実する改変がおこなわれていた頃、『源氏物語』を絵巻の形で語り直す大がかりな企画も進行していたものと思われる。その果実が、徳川美術館・五島美術館に分蔵される国宝「源氏物語絵巻」である。『源氏物語』54巻の各巻から１～３場面ほどを選んで各場面を詞と絵１図で表現、『源氏物語』の連続する数巻分を絵巻１巻に仕立て、全体としては10巻80図以上から成る大規模な絵巻セットとするのである。現在ではその多くが失われ、20段分ほどが伝存するにすぎない。そのなかで、第36巻「柏木」から第40巻「御法」までの連続する５巻を描いた８段は、もともと絵巻１巻を成していたと考えられることから、柏木グループと称され、そのすぐれた出来ばえが高く評価されている。この柏木グループは、光源氏晩年の複雑微妙な物語を、絵巻という媒体を用いてどのように表しているのか。この問題を解くためには、『源氏物語』や国宝「源氏物語絵巻」だけでなく、物語絵の表現方法や、物語絵の多様な媒体についての考究も欠かせない。これまで積み重ねてきた研究を整理・総合しつつ、この問題に取り組んだ。

本研修で得た結論を一言で述べるならば、『狭衣物語』の創作・改変も、国宝「源氏物語絵巻」の制作も、その背景には『源氏物語』という偉大な作品への敬意と憧れがある、ということになるが、その詳細は２年以内に公表する。